

オンライン面接試験の実施過程

—鳥取大学総合型選抜第 1 次選考の事例—

森川 修 (鳥取大学)

2022 (令和 4) 年度鳥取大学総合型選抜の第 1 次選考では、これまで面接試験を対面で行っていたが、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響により、初めてオンラインで実施した。面接方法をオンラインに変更するまでに至る経緯に関して時系列にまとめた。さらに、面接試験をオンラインに変更後、試験実施までの約 1 か月間に行った準備状況について明らかにした。オンラインでの面接試験は、トラブルがなく実施でき、受験生と実施側の双方にとって、移動時間と交通費の 2 つの問題が解消された。

キーワード：オンライン、面接試験、新型コロナウイルス感染症、COVID-19

1 はじめに

鳥取大学は、2004 (平成 16) 年度入試から AO 入試を導入した。この年の第 1 次選考は、学部教員とアドミッションセンター専任教員が協力して書類審査のみを行った。その後、第 2 次選考を志望学科の教員が実施した。合格発表以降、受験生の所属する高校の教員に聞き取り調査をしたところ、第 1 次選考の書類審査について「提出書類には第三者の手が加えられている可能性が高いため公平性に欠く」との意見が多かった (中村・福島, 2005)。そのため、2 年目に当たる 2005 (平成 17) 年度入試から第 1 次選考には、書類審査に加えて、面接試験を課すこととし、第 1 次選考のすべて (書類審査と面接試験) をアドミッションセンター教員が、第 2 次選考に関わるすべての審査を学部教員が担当し、選考ごとで分担した。

第 1 次選考に面接を加えることで、受験生の旅費負担や拘束日程等の負担を増やすことになり、受験を敬遠される懸念から、当時の国立大学として数例しかなかった「地方試験会場」を設置した。第 1 次選考の面接会場は、前年度の AO 入試志願者の出身地を参考に、鳥取キャンパス (鳥取市) に加えて、東京都区内、大阪市、岡山市、福岡市の鳥取県外に 4 つの会場を設けた。このように複数の会場設置の例は皆無であり、AO 入試では初めて地方試験会場を設置して、面接試験を実施した (中村・福島, 2006)。これらは、鳥取大学の「第 1 期中期目標の達成状況に関する評価結果」に、特筆すべき優れた点として挙げられた (2021, 大学評価・学位授与機構)。さらに 2020 (令和 2) 年度入試からは名古屋市にも会場を設けて 6 会場に増やした。

ところが、2020 (令和 2) 年 6 月 19 日公表された令和 3 年度大学入学者選抜実施要項 (文部科学省, 2020) で、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) に伴う高等学校の臨時休業期間に配慮し、総合型選抜 (旧: AO 入試) の入学願書受付が、当初の 9 月 1 日から 15 日以降に遅らせることとなった。本学では、9 月 1 日から 7 日が出願期間、19 日から 27 日にかけて第 1 次選考を実施、10 月 6 日に第 1 次選考合格発表、10 月 17 日、18 日に第 2 次選考を実施して、11 月 2 日に合格発表するというスケジュールをすでに公表していた。当然、地方試験会場の予約も終わっていたが、その時点からのスケジュール変更は非常に困難であった。また、第 1 次選考の面接試験を遅らせると、第 2 次選考の実施や総合型選抜以降に実施する学校推薦型選抜 I など他の選抜のスケジュールまで大きな影響を与えるため、この年に限り、第 1 次選考での面接試験を取り止め、書類審査のみで実施した。

2021 (令和 3) 年になっても新型コロナウイルスの感染者数は、増加と減少を繰り返していた。7 月には第 5 波と呼ばれる感染者数が急増する状況となり、7 月 29 日には、日本での感染者数が初めて 1 万人を超えた。この状況が継続すれば、大学の規定によって県外への出張が困難となることは明らかであった。そこで、8 月 19 日の入学センター会議において、2022 (令和 4) 年度の総合型選抜第 1 次選考の面接試験を対面からオンラインで実施することを決定した。その後、第 1 次選考面接試験の開始日である 9 月 18 日までの 1 か月弱で準備し、9 月 28 日には無事にすべての面接試験を終えることができた。

本報告は、16 年間に渡り、鳥取大学総合型選抜の

特色であった第1次選考の地方会場での面接試験を取り止めて、オンラインでの面接試験を行ったプロセスをできる限り明らかとすることで、今後、他大学での実施の参考となることを目的とした。

2 先行事例について

新型コロナウイルス感染症が流行する2020（令和2）年度入試以前でのオンライン面接試験に関して、学内での大学院入試（博士後期課程）で外国人を対象にSkypeを利用した例を認知している。学部入試については、東洋大学が2017（平成29）年度入試から「Web体験授業型入試」を初めて導入している¹⁾。

2021（令和3）年度入試において、新型コロナウイルス感染症を考慮し、学部入試をオンラインで実施した大学は複数で知られている。また、国公立大学でも実施されているが、論文等での報告例は、九州工業大学と叡智大学しか見つけられなかった。

九州工業大学の例では、2021（令和3）年総合型選抜Iにおいて、オンライン入試へ全面移行した経緯、接続テストを含む実施方法などが詳細に記載されている。さらに、合格者を対象とした調査として、ICT端末を用いた作業経験、オンライン入試に関する不安や受験時のトラブルや困ったこと、良かった点と改善点を聞いており、同様の入試を行う上で非常に参考となる事例が紹介されていた（大野ほか、2021）。

公立大学である叡智大学は、2021（令和3）年の4月に開学した大学であり、その1期生から、オンラインによる入試を実施した。実施準備や試験実施体制の他に、オンラインでのトラブル事例が掲載されており、他の大学においても大いに参考となる情報が掲載されていた（大野、2021）。

各大学においては、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮して、これまでの実施してきた試験実施方法を、時間が限られた中でいろいろな苦労や努力の末に変更していると思われる。それらが共有財産として残らないのは非常に残念である。入試の実施であることから、詳細に関して記載できない場合もあるが、どの時期にどのような変更をしたか、可能であればその詳細を記録として残すことは、他大学の参考になることは非常に大事であると考えられる。

3 鳥取大学総合型選抜第1次選考の面接方法の変更

ここからは、2022（令和4）年度鳥取大学総合型選抜第1次選考の面接試験を対面からオンラインに変更した経緯について、新型コロナウイルス感染症に関する状況も含めて時系列で紹介する。

3.1 2021年3月以前

鳥取大学では2013（平成25）年度入試から、AO入試をより詳しく知ってもらうために、AO入試合格者を取材する形式で、「AO入試ガイド（現：総合型選抜ガイド）」という冊子を作成しており、そこに、第1次選考の会場と日程を掲載している²⁾。この冊子の発行は3月中であり、例年であれば、この時点で5つの地方試験会場を予約している。しかし、この年は、前年（2020年）から世界において爆発的に広まった新型コロナウイルス感染症の影響に収束の気配が見られず、会場の予約を見合わせたため、試験日や会場は未定として作成した。

また、第1次選考の面接を実施する9月中旬から下旬にかけて、新型コロナウイルスの感染拡大が起こった場合、2年連続で面接を実施しないことを避けたいと考え、第1次選考でのオンライン面接の可能性に関して入学センター内で議論した。

日本での新型コロナウイルスの状況は、2020年末から第3波と呼ばれる感染者が急増してきた時期だった。2021年1月7日に一部地域で緊急事態宣言が発令され、1月8日には、全国での感染者数は約8,000人に達した。それをピークに減少し、3月に入ると感染者数が1,000人を下回る日も見られ、3月21日をもって、一部地域に発令されていた緊急事態宣言はすべて解除された。

3.2 2021年4～5月

4月に入り、各学部の意見を踏まえつつ、総合型選抜第1次選考の面接試験を対面で実施することとし、地方試験会場の予約を行った。

5月18日に開催した2021（令和3）年度第1回入試制度専門委員会で2022（令和4）年度総合型選抜入試日程が承認され、第1次選考は、9月18日～29日と決定した。その際、第1次選考の選抜方法へ但し書きとして「新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況によっては、個人面接を実施せず、書類のみで選考を行う場合があります。その場合、ホームページでお知らせしますので、最新情報を確認してください。」とし、総合型選抜募集要項に記載することも了承された。これは、2021（令和3）年度入試と同様、面接試験が実施できない可能性が想定されたためである。

この頃は、新型コロナウイルスの感染者が徐々に増加し始め、4月25日から一部の地域で緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発令された。そして、5月12日に、全国の感染者数が7,000人を超えるピークとなった第4波と呼ばれる時期だった。

3.3 2021 年 6 月

6 月 4 日に文部科学省は「令和 4 年度大学入学者選抜実施要項」を発表した (2021a, 文部科学省)。それと合わせて「令和 4 年度大学入学者選抜に係る新型コロナウイルス感染症に対応した試験実施のガイドライン」も発表された (2021b, 文部科学省)。そのガイドラインの『面接試験, 実技試験の実施』の項では、「対面での実施が必要と判断する場合には、面接試験については、受験生同士及び評価者との距離は 2 メートル以上を確保するなどの飛沫感染防止策を徹底すること」とあった。これに関しては、これまで鳥取大学で行ってきた AO 入試第 1 次選考の面接において、受験生 (1 名) と評価者 (面接官) との距離は 2 メートル以上取っていた。また、「ドアや窓の開放等により、換気を徹底すること」とあるが、前年度の学校推薦型選抜や一般選抜の面接で行ってきた感染症対策で十分に対応できると思われた。

さらに、『第 14 新型コロナウイルス感染症対策に伴う試験期日及び試験実施上の配慮等』の⑥に「ICT の活用等」の項目が加えられ、オンライン面接の可能性について、再度、入学センター内で議論した。

その時期は、全国の新型コロナウイルス感染者数も比較的落ち着いており、6 月下旬には 1 日当たり 1,500 名程度で推移していた。

3.4 2021 年 7 月

7 月 14 日に鳥取大学の 2022 (令和 4) 年度入学者選抜概要を公表した (2021a, 鳥取大学)。また、7 月 26 日には、2022 (令和 4) 年度総合型選抜学生募集要項を公表し、第 1 次選考の各地方試験会場の日程も記載した (2021b, 鳥取大学)。

しかし、7 月に入ると、感染者数が急激に増加し、いわゆる第 5 波が始まった。7 月 11 日には、オリンピックを控えた東京都で緊急事態宣言が発令された。そして、7 月 29 日には、全国での 1 日の新型コロナウイルス感染者数は初めて 1 万人を超えた。総合型選抜学生募集要項を公表したばかりの時期であったが、オンライン面接を考慮せざるを得ない状況となった。

3.5 2021 年 8 月

8 月 2 日には、緊急事態宣言が 6 都府県に拡大した。夏休みやお盆の期間となるため、人の移動が多くなり、8 月 13 日には、新型コロナウイルスの感染者数は初めて 2 万人を超えた。

盆明けの 8 月 19 日に開催した入学センター会議において、総合型選抜第 1 次選考で対面での面接実施は

困難であると判断し、オンライン面接の実施を決定した。翌日の 8 月 20 日に入試委員会をメール会議にて開催し、総合型選抜第 1 次選考の面接試験を対面からオンラインに変更することが承認された。

この同じ日である 8 月 20 日には、緊急事態宣言が 13 都府県へと広がり、その日が新型コロナウイルス感染の第 5 波のピークとなり、感染者は 2 万 5 千人を数えた。

そして、8 月 31 日に総合型選抜学生募集要項の変更を公表した。第 1 次選考の選抜方法として、面接試験を全国 6 会場での対面ではなく、オンラインで実施するという変更についてホームページ上に掲載した。それは、出願開始の前日のこととなった。

4 オンライン面接の準備

ここでは、オンライン面接の実施を決定した 8 月下旬からの準備について、大学側、受験生側の双方の状況について説明する。

4.1 オンライン面接で利用するツール

オンライン面接を実施するためには、ツールが必要である。非常に高価で一般的に普及していないテレビ会議システムではなく、Web 会議システムの活用を考えた。新型コロナウイルス感染症の流行後、Web 会議システムの利用は、企業での会議や打ち合わせ、大学の授業、各種講演会やセミナーなどで急激に広まった。Web 会議システムは、パソコンだけでなく、タブレットやスマートフォンなど、高校生でも扱える機器で利用可能である。

次に、Web 会議システムの種類として Cisco Webex, Google Meet, Microsoft Teams, Zoom などが、それらの中から Zoom を選択した。その理由は、これまで入学センターの教員が参加したイベント等で一番多く使われていたシステムだったことが挙げられる。Zoom が使われ始めた頃は、セキュリティ対策に問題があるとの情報もあったが、設定を適切に行っていれば問題ないことが確認できた。

また、実施側 (教員) が、オンラインで高校内での大学説明会や講演を多数行った経験から、その操作に十分慣れていることもあった。さらに、鳥取大学では、総合型選抜と学校推薦型選抜 I の合格者を対象に入学前教育を実施しているが、2021 (令和 3) 年度入試合格者に対して 2020 (令和 2) 年 11 月、12 月と 2021 (令和 3) 年 2 月の合計 3 回、Web での入学前教育研修に Zoom を活用してブレイクアウトルームの設定など、一通りの操作をホストとして経験していた (森川

ほか、2021)。

ただし、入試課の職員の中には、不慣れな者もあり、中には、Zoom の使用経験がまったくない者もいた。これは、大学内のオンライン会議では、すべて Google Meet を使っていたためである。システムが異なっているにもかかわらず、基本的な仕組みなどは変わらず、ボタンがどこにあるかなどの違いであるため、準備段階で次の節(4.2)に記載した通り、操作に慣れてもらうこととした。

4.2 オンライン面接の学内テスト

オンライン面接は、5.2 に記載した通りの面接手順を計画した。この計画通りに実施できるか、問題点がないかを確認するため、9月上旬に、オンライン面接に関わるすべての入試課職員、入学センター教員が、それぞれ、受験生役、事務職員役、面接官役を交代しながら担当した。そこで、手順に問題がないか、どのタイミングでどのような操作をすべきかなどをチェックしながら、本番の面接に備えた。また、最終チェックとして、面接開始日の2日前に当たる9月16日に、ミーティング ID 等を本番と同じものを用いてシミュレーションを行った。

4.3 オンライン面接でのルール設定

オンライン面接の懸念材料として、不正行為の可能性、特に第三者の介入が挙げられる。そこで、面接試験をする際、受験生以外は試験室に立ち入らないことを求めた。そのため、受験生には、自宅の自室や高校の教室等の個室での受験をお願いした。

また、面接試験の際、受験生にはイヤホン、もしくは、ヘッドホンの着用を義務付けた。これは、面接官の質問内容が外部に聞こえないようにするためであった。このようにすることで、もし、試験室内のカメラの映らない部分に第三者が居ても、受験生が質問に困ったときに指示を出すことができないと考えた。さらに、総合型選抜第1次選考の面接試験の内容として、一問一答形式の質問ではなく、志望理由書や自己推薦書の内容からその内容を深く掘り下げて質問し、その回答からさらに質問する方法を行っている。それらより、大学で学ぶために必要な基礎力と意欲について、チャレンジ精神・意識(関心・動機・意識)、コミュニケーション力(理解力・伝達力)、潜在力(自主性・リーダーシップ・柔軟性・想像力・その他の個性)の3つの観点から評価しており、オンラインになってもその評価に関して変更しなかった。それと、口頭試験のように教科学力を測ることをしていなかったこと

から、万が一、室内に第三者が居ても、さらに、書類等を持ち込んでいても受験生には有利に働くことがないと考えた。受験時のチェックでは、室内に誰も居ないことを口頭で尋ねるだけで、カメラで室内すべてを映させることはしなかった。それとカメラで室内を映すことに関しては、受験生のプライバシーを考慮したことも要因の1つである。

また、面接が終了した受験生が他の受験生に何らかの情報を伝えられると考えられるが、これに関しては、対面の面接でも同様のことが行われていると推測された。例えば、同じ高校の受験生が存在する場合、先に受験した者が、あとから受験する者に面接内容を伝達していることは容易に想定されるが、先に記載した通り、一問一答形式の質問や教科学力を測る問いではなく、受験生個人により回答内容が異なることから、このことに関する配慮は行わなかった。

その他には、静穏な環境を保てること、良好かつ安定したインターネット環境に接続可能な場所であることを求め、有線でのインターネット接続、または、Wi-Fi の設備が整ったところでの受験を推奨した。さらに、通信不良が発生したときに備えて、その場で連絡の取れる携帯電話などを準備してもらった。それでも、面接試験が続行できない事態となれば、面接日の最後の時間帯に移動する、あるいは、面接日を変更するなどの柔軟な対応をして、できる限り面接試験が実施できる準備を整えた。

これらの注意事項、Zoom の接続マニュアル、面接日程、接続テストの日程を通知するメールを9月13日に受験生へ送付した。

4.4 受験生の接続テスト

出願受付終了後、面接試験までの期間、受験生全員に対して接続テストを実施した。受験生によっては、高校の授業でオンライン(Zoom の扱い)に慣れている者もいると思われるが、全員がアクセスできて、画像や音声に問題がないことを確認しなければ、面接試験を実施することはできない。もしも、どうしてもオンラインでの面接試験が受験生の自宅や高校で行えない場合は、大学への来学も検討した。ただし、他の受験生との公平性を期すために、対面ではなく、別室を設けて、オンラインでの面接試験を準備することとした。志願者 92 人全員に、リモートでの面接試験が可能か尋ねたところ、全員が実施できるとの回答だった。

接続テストは、9月14日から17日の間、こちらから指定した時間帯(15時から18時30分)に行った。もちろん、都合が悪い場合には、面接試験の前日まで

に変更した日時とし、志願者全員と接続テストを実施した。その際に、面接当日と同じ場所での接続をお願いした。92 人の志願者のうち、高校からアクセスした者が 47 人、自宅からアクセスした者が 45 人とほぼ同数だった。また、アクセスした機器は、パソコン³⁾が 62 人、タブレット 24 人、スマートフォンが 6 人だった。接続テストの際、Zoom の扱いに不慣れで、マイクがミュートのまま話をしている、ミュートの解除がわからない、カメラの位置（ノート型パソコンの場合、前面と背面）の切り替えができないなど、さまざまな事例があったが、こちらからのアドバイスにより、問題なく面接試験ができることを確認した。

5 面接試験の実施について

次に、オンラインでの面接試験の実施について、従来の対面での面接と比較して説明する。また、オンライン面接実施後、受験生に対して任意のアンケートについても紹介する。

5.1 対面での面接試験の実施

従来の対面での面接試験の実施は、いずれの会場でも入試課職員 2 人、入学センター教員 2 人の合計 4 人で行っていた。

入試課職員 2 人は受付に居て、受験生が到着後に受験生の本人確認をし、面接に関する注意事項を告げて受験生控室に案内した。面接開始時刻が近づくと、受験生控室に受験生を呼び、面接室の前にまで連れて行き。面接開始時刻になったら合図をして、受験生に面接室をロックさせた。その後、受験生が面接室へ入室した後は、入学センター教員が面接を行い、時間となれば受験生を面接室から退室させた。最後に事務職員が受験生に注意事項を伝えて帰らせた。

一方、入学センター教員 2 人は常に面接室に居て、受験生の面接試験を実施した。面接終了後に受験生が退室し、次の受験生が入室する間に合議で評価した。

5.2 オンラインでの面接試験の実施

オンラインでの面接においても、基本的には対面での面接と同様に実施した。Zoom では、待機室、ミーティングルーム（メインセッション）、ブレイクアウトルーム 2 室を使った。対面での受付がミーティングルームにあたり、2 名の事務職員はここに居た。受験生は、指定時刻までに指示された Zoom へアクセスするが、その際に待機室の機能を使っているため、受験生は事務職員が許可しない限り、ミーティングルームへ入ることはできない。また、Zoom 入室時の名前の

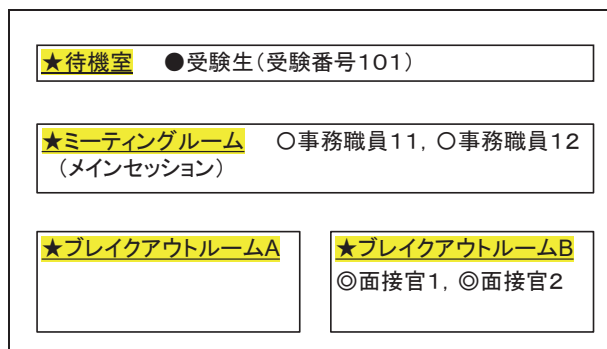


図 1 受験生のアクセス時

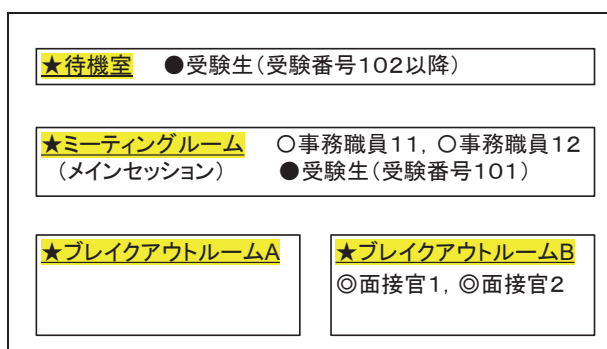


図 2 受験生の確認時

表示は受験番号とさせた。図 1 に、最初の受験生がアクセスした時点での Zoom の各ルームにおける状況を示した。事務職員は、指定した入室時刻となったら、受験生に入室許可を与え、受験生がミーティングルームに入室したら、受験生の確認を行った（図 2）。その際に、接続状況の確認として、カメラ、マイク、イヤホンの動作チェックを行った。最後に面接の流れと注意事項を伝達し、誰もいないブレイクアウトルームへ実施側で移動させ、面接開始時刻まで待機させる。その際に 1 名の事務職員は常にミーティングルームにいるが、もう 1 名の事務職員が受験生と一緒にブレイクアウトルームへ移動して、予定時刻に面接が始められるかを管理した（図 3）。

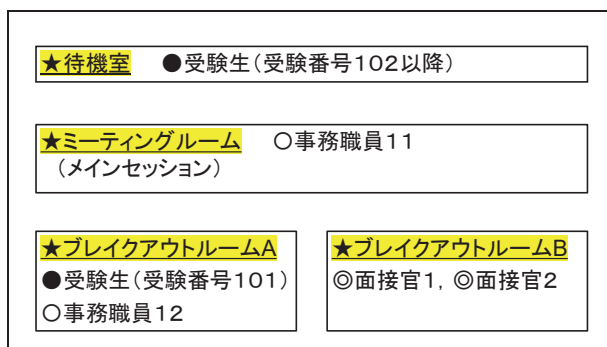


図 3 受験生の確認後

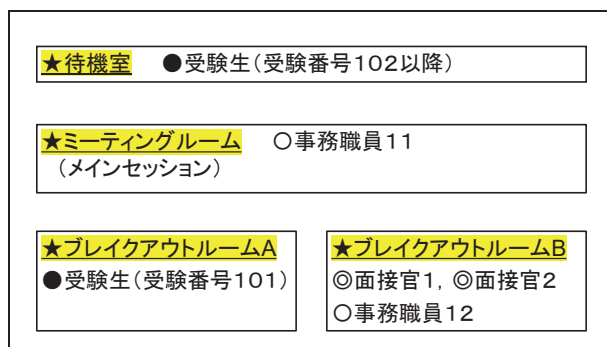


図4 面接試験の開始1分前

一方、面接官（入学センター教員）2名は、別のブレイクアウトルームで待機する。面接開始時刻1分前に、受験生のブレイクアウトルームに居る事務職員が、面接官の居るブレイクアウトルームへ移動し、定刻に面接が開始できることを伝えた（図4）。面接開始時刻になると、面接官が受験生の居るブレイクアウトルームへ移動し、面接試験を開始した。面接官の移動を確認したら、面接官と一緒に居た事務職員はミーティングルームに戻り、次の受験生を入室させた（図5）。面接官は面接試験を実施し、終了したら面接官の操作により受験生を退出させた（図6）。その後、次の受験生の面接開始時刻までに、面接官は合議をして受験生の評価を行い、面接開始時刻となれば、別のブレイ

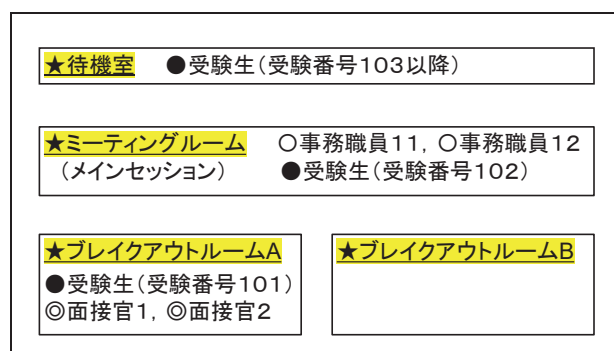


図5 面接試験の実施中

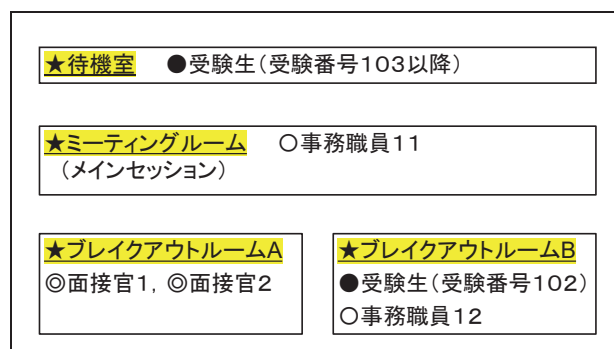


図6 面接試験の終了後

クアウトルームへ移動して面接試験を行った。この流れを繰り返して、オンラインでの面接試験を実施した。

オンラインでの面接時間は対面の時と同じく15分としたが、面接の間隔は対面の5分からオンラインでは10分と延長した。正常に面接を行うことができれば、5分で面接した受験生の評価と次の受験生の書類の準備は十分に可能である。しかし、オンラインの場合、少しの通信環境の変化により、音声聞き取りにくいなどのちょっとしたトラブルの発生が十分に予想される。そのために、空費する時間を見越して面接の間隔を10分間とし、多少のトラブルがあっても、できるだけ多くの受験生が当初の予定時刻に面接が行える工夫をした。もし、トラブルの解消に5分以上要し、次の受験生に影響を与える場合は、当初の時刻での面接を中止し、別の日時に面接を行うこととした。

令和4年度（2022年度）入試において、総合型選抜の志願者は92人で全員が受験した。画像や音声のトラブルはみられなかったが、面接時間の変更した者が1人いた。高校で受験する予定の1人が、イヤホン自宅に忘れたケースだった。これは、受付の際に、受験生本人から申告があった。すぐに別のものを準備できる状況でなかったため、自宅に取りに帰ってもらい、面接日の最終受験生の次に時間帯を設定して、面接を行った。

5.3 実施後のアンケート

実施側からは、第1次選考で問題なく面接試験を実施できたと考えたが、受験生がどのように考えていたかわからない。そこで、第1次選考終了後の10月1日に、メールでオンラインでの面接試験に関するアンケートを依頼した。回答期限を1か月としたところ、志願者92名中、59名から回答があった。また、第1次選考結果発表が10月6日であった、それまでに回答した者は52名と大多数を占めた。

アンケートの回答の中で、意見が分かれたものについていくつか説明する。まず、使用した機器の所有者について尋ねたところ、「自分のものを使用した」との回答は14名で、「学校のもの」が27名、「家族と共用のもの」が13名だった。同様にイヤホン（ヘッドホン）の所有については、「自分のものを使用した」との回答は34名で、「学校（先生）のもの」が15名、「家族と共用のもの」が10名だった。また、接続の際に自分だけで行ったか、誰かに手伝ってもらったかについては、「自分だけで行った」は24名で、「高校教員の手伝いを求めた」は22名、「家族の手伝いを求めた」は13名だった。

現在の高校生のスマートフォンの所有率は非常に高く、それで面接試験は可能であるが、4.4 にも記載した通り、スマートフォンの利用は 10%以下だった。それは、大学の面接ではパソコンの使用が望ましいと考えたのか、それとも高校教員に言われたかは不明であるが、普段は自分で使わない機器を用いるため、自分だけで接続した者が少なかったと思われる。

次に、面接の実施方法を尋ねたところ、「オンラインが良い」は 19 名、「どちらでも良い」は 22 名、「対面が良い」は 18 名とそれぞれ 1/3 ずつと分かれた。それぞれ理由を複数選択で挙げてもらったところ、オンラインの方が良い場合、「感染リスクの不安がない」が 13 名、「会場への移動がない」が 12 名、「直前まで練習ができる」が 9 名だった。一方、「対面が良い」の場合、「面接官と直接会って話ができる」が 18 名とほとんどで、「機器の準備が大変」が 4 名、「Zoom の操作や接続方法が難しい」が 2 名だった。どちらでも良いと回答した者でも、「面接官と直接会って話ができる」が 16 名と圧倒的に多かった。

アンケート回答者 52 名中、34 名が「直接会って話ができる」ことを良いと考えていた。これは、対面での面接の方が相手に伝わる情報が多いと考えていると思われる。鳥取大学総合型選抜第 1 次選考では、志望理由書や自己推薦書からその内容を深く掘り下げて質問し、その回答からさらに質問する方法を行っている。つまり、面接をする側は、大学で学ぶ力を、質問に対して具体的な説明を論理的にできているかについて判定するため、必ずしも面接を対面で行う必要がないと考えている。また、第 2 次選考では、すべての学科・コースで対面での面接を行っており、もし不足する部分があっても、それを補えると考えている。

6 おわりに

2022 (令和 4) 年度鳥取大学総合型選抜の第 1 次選考で、これまで対面で行っていたオンラインに変更して実施した。面接方法の変更決定に至るまでの経緯や準備状況について明らかとした。結果としてオンラインでの面接試験は、トラブルがなく実施できた。この結果を受けて、鳥取大学では 2023 (令和 5) 年度入試以降も総合型選抜の第 1 次選考では、オンラインで面接試験を実施する予定である。受験生にとって移動時間と旅費負担の金銭的な問題が解消され、それは、大学側にとっても同様である。

一方で、実施後のアンケートにより、直接会って話ができる対面での面接が良いと考えている受験生が多いことが明らかとなった。この点については、今後、

高校教員を対象とする説明などで、鳥取大学の総合型選抜第 1 次選考での面接の観点を丁寧に説明する必要があると思われる。

注

- 1) 以下のサイトは、東洋大学が 2017 (平成 29) 年度に行った「Web 体験授業型入試」のプレスリリースである。
<https://www.toyo.ac.jp/media/Images/Toyo/press/list/list2765-5623/20160721.ashx?la=jaJP&hash=F07D17386F1D18C096168F51261AEB4F2F94DA0B>
- 2) 冊子と同時に、同じものを Website にも掲載している。
<https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/pamphlet/ao>
- 3) パソコンの種類でデスクトップ型に外部カメラを付けた場合とノート型の別はカウントしていない。

参考文献

- 大学評価・学位授与機構 (2021). 「第 1 期中期目標期間の達成状況に関する評価結果 鳥取大学」 (大学評価・学位授与機構)
https://www.niad.ac.jp/sub_hyouka/kokudai2010/no6_3_66_tottori_2010_2.pdf (2022年8月24日).
- 文部科学省 (2020). 「令和 3 年度大学入学者選抜実施要項」 (文部科学省)
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/mxt_kouhou02-20200619_1.pdf (2022年8月24日).
- 文部科学省 (2021a). 「令和 4 年度大学入学者選抜実施要項」 (文部科学省)
https://www.mext.go.jp/content/20210604-mxt_daigakuc02-000005144_1_1.pdf (2022年8月24日).
- 文部科学省 (2021b). 「令和 4 年度大学入学者選抜に係る新型コロナウイルス感染症に対応した試験実施のガイドラインの一部再改訂について」 (文部科学省)
https://www.mext.go.jp/content/211228_mxt_daigakuc02_000005144-1.pdf (2022年8月24日).
- 中村肖三・福島真司 (2006). 「進化するAO入試—“青い鳥”を求めて—」『大学入試研究ジャーナル』 **16**, 83–88.
- 中村肖三・福島真司 (2005). 「鳥大方式AO入試『入学前教育』について—アウェアネスを持った学生作りのために—」『大学入試研究ジャーナル』 **15**, 111–118.
- 大野義文 (2021). 「叡智大学のオンラインによる入試および一般選抜の教科・科目試験のCBT試験の実施に関する報告—」『令和3年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 (第16回) 研究発表予稿集 (オープンセッション用)』, 119-126.
- 大野真理子・花堂菜緒子・播磨良輔 (2021). 「オンライン入試の意義と課題—九州工業大学における総合型選抜 I の事例をもとに—」『令和3年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会

大会（第16回）研究発表予稿集（クローズドセッション用）』, 68-73.

鳥取大学 (2021a). 「令和4（2022）年度入学者選抜概要」（鳥取大学）

<https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/wp-content/uploads/2021/08/r4gaiyou2.pdf>（2022年8月24日）.

鳥取大学 (2021b). 「令和4（2022）年度総合型選抜学生募集要項」（鳥取大学）

https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/wp-content/uploads/2021/09/r4_sougougata_youkou_henkou3.pdf（2022年8月24日）.